

あーとモノリス

— 在るがままの土石を焼く —

2020年6月10日
萩原茂樹



1. あーとモノリスの誕生

2017年の生命の星・地球博物館における特別展示「地球をはぎ取る」を見て、この「モノリス」を焼いてみようということになった。

そこで、“標本”から“アート”へとその目的を変えた、「あーとモノリス」という焼き物が陶研のテーマに加わった。



塩原湖成層(43x43cm)1230°C

2. 手法別作品例

A. 地層のはぎ取り

狙いを定めた地層の表面を平滑にしてから、そこに寒冷紗やシート等の布をあてがい、その上から接着剤を塗ってのはぎ取る。接着剤には、[トマックNS-10(三恒商事)]が通常使われる。この手法は、全ての地層に適用できるわけではない。地層が硬かったり、粗かったりする場合は、別の手法をとる。

剥ぎ取り層

母体の地層

三崎の堆積・砂岩 1230°C(35x38cm)



B. 地層の掻き取り

地層がはぎ取りできない時は、部分的に掻きとって定着すべき基板上に並べ直すことが必要となる。正確な再現には、作業前のスケッチや写真撮影が有効となる。

岩溶岩

高尾凝灰岩(35x38cm)



C. 人為的な作品

自然の地層を写すのではなく、一種類或は複数の土石を組み合わせて、表現したい作品が作られる。

ブラックホール(90x90cm)

伊豆の土石9種類を使用	
土石の種類	耐火度(1230℃)
猫越、門野原、宇久須高原、風早峠	不熔
伊豆若草石、室岩洞、弁天島(松崎)	半熔
船原(スコリア)、平野山(松崎)	熔融



3. 焼成による作品の定着

はぎ取り、掻き取り、又、人為的につくられた作品は、基板上で焼成される。作品が焼成温度によって基板に溶着すれば問題ないが、溶着しない場合は予め基板上に接着剤を塗って置く必要がある。接着剤としては、焼成温度に合った釉薬を使う。

基板は、重さを抑制するために薄づくり心掛ける。タイルでも代用できる。

芳村先生の調合

接着温度	楽透明釉	珪石	長石	石灰	カオリン
850~1000℃	100	—	—	—	—
1050~1060	100	20	—	—	—
1030~1100	100	30	—	—	—
1050~1120	100	40	—	—	—
1030~1280	—	—	5	2	1

素焼きされた基板(38x35x4mm)



4. 焼成温度の設定

土石の種類や層序によって一般に耐火度は異なる。
従って、一つの焼成温度で基板の上に溶着することはできない。
どの土石に合わせて焼成するのが、作品の表現に適当なのかを予めテストしておく必要がある。

- ① 目的とする質感や色合いを得るために必要な温度
OF or RF, 鉄の状態変化
- ② 複数の熔融温度が必要な時、優先される温度



1230℃ OF焼成
左半分関東ローム層
右半分は大船層

5. 額装

額装するには、裏打ち材として4mm厚程度の合板を用意する。
合板と基板は、接着剤(コニシ、K-10)を使って貼り付けて額装する。

